開塾二十五周年記念

立林塾

目次

はじめに（開塾二十五周年に寄せて）―― 4
1．生徒二人から始めた英語教室 ―― 6
（1）開塾まで ―― 6
（2）開塾当時の上菅田英語教室 ―― 7
（3）算数・数学も加わって ―― 10
（4）伸びて行く子供たち ―― 12
・中学一年生のMさんの場合 ―― 12
・小学校六年間、週一回英語に通ったNちゃんの場合 ―― 14
・英語だけは勉強の仕方がわからなかったK君の場合 ―― 16
2．西谷教室を開校して ―― 17
（1）二〇〇六年四月に開校 ―― 17
（2）塾を支えてくれる先生方 ―― 21
3．「子供たちの英語上達の秘訣」お教えします ―― 25
（1）英語喉(のど)で、大きな声で音読 ―― 25
（2）BBカードを聴かせて、聴かせて、そしてリピートする ―― 28
（3）絵本を貸し出して家でも多読、そして音読大会 ―― 31
おわりに（これからも地元の楽しい塾を目指して）―― 36

はじめに

（開塾二十五周年に寄せて）（立林洋子）

二十五年という年月は、振り返ってみると長いようであっという間の短い出来事だったように思います。

ただ夢中で歩いてきただけというのが正直な感想なのですが、思えばそんな私たちの塾がここまで来られましたのは、ひとえに私どもに通ってくださった生徒さんや、私どもを信頼してお子様たちをお預けくださった親御さんの皆さま、さらには私や塾を支えてくださった講師の先生方のお蔭だと改めて感謝、感謝の気持ちです。

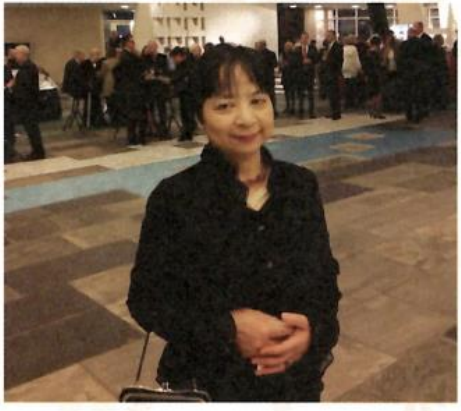
考えてみますと二十五年前には、お子さんに英語を習わせてみようという親御さんは多くはなかったと思います。

小学校で外国語を学ぶということもありませんでしたし、社会に出たら英語が

必要になるぞという危機感もなかったでしょう。それでもそんな中で、とにかく子供たちに英語を教えてあげたいという気持ちが自分の中にあり、色んな試行錯誤をしながら教え方の工夫もしてきたつもりです。やはり自分の中に教師の血が流れていた（父親も英語の教師でしたから）ということでしょうか、また中学から英語が大好きだったということもあると思います。

今は英語に対するニーズも随分高まって、小さなお子様にも英語に触れさせようという親御さんも増えてきました。

私どももますます努力して効果的で楽しい授業を続けて行ければと考えております。



一、生徒二人から始めた英語教室

(1) 開塾まで

「立林英語塾」を開塾したのは一九九〇年（平成二年）の四月ころで、最初は、ご近所のお子さん生徒二名と娘の由紀を加えて、小学生向けの英語を楽しく教えるという感じでスタートしたのを覚えています。

それまで私は、故郷の静岡の大学を卒業して横浜に来て、県立高校（光陵高校）で英語教師をしていました。

結婚後、長女（由紀）が生まれるのをきっかけに学校を退職し、その後、夫が勤務の都合で「香港」に赴任することになり、私も子供たち（由紀と亮）を連れて六年近く香港に滞在することとなりました。

一九八四年から一九八九年のことです。家族一緒の「ＨｏｎｇＫｏｎｇ」生活は楽しいもので、その間に次男の淳も生まれています。

香港では、近くのマンションに住む日本人のご家族と楽しく過ごしていましたが、そのころ奥様達に頼まれて香港在住の日本人のお子さんたちに「英語」を教えるということをしていました。

その時の楽しい経験が、日本に帰国した後も、子供たちに英語を教えてみようと思ったキッカケになったような気がします。

一九八九年（平成元年）の夏に帰国した当初は、埼玉県のマンションに住みましたが、やはり以前暮らした横浜市保土ヶ谷区が恋しくなり、さっそく上菅田町に中古住宅を探して、翌年初めには引っ越してきました。

(2) 開塾当時の上菅田英語教室

生徒二人プラス長女の由紀（当時小五）という小人数でスタートした「こども英語教室」です。

最初は週一回、一時間程度の授業をしていました。
そのころの授業の内容は、テキストを使って英語を読むこととか、フォニックス（英語の綴りを見て英語の読みがわかるようなコツを教えるもの）などを教えることが中心で、今とは少し違う内容でした。
それから皆で、英語の演劇を発表したりもしていました。

（なお今はテキストを使わず、絵本をたくさん読むこと《多読》や、ＢＢゲーム、動詞活用・形容詞活用カードなどのゲーム《カードゲーム》を通じて、リズムが良い言い回しをそのまま覚え、英語のカンを小さいうちから養って行くことが中心になっています。）

さて開塾当時は自宅の居間を使って夕方に授業をしていたのですが、夫がたまに休暇で家にいるようなときは、さすがに居づらいというようなこともあり、また勉強に来られている生徒さんや一緒に来られるお母さん方にも不自由だろ

うからと、家の庭をつぶして小さなプレハブの教室（八畳間）を作るということになりました。
一九九一年（平成三年）ころのことです。

その後は由紀が中学生になると「中学生の英語教室」を開き、その三年後に彼女が高校生になると「高校生の英語教室」を開設して、順にクラスを増やして行くことになります。
いつの間にか次第に生徒さんの人数が増え、五十～六十人くらいになってきたのを覚えています。

(3) 算数・数学も加わって

立林塾はもともと「小学生の英語教育を効果的にやる！」をモットーにやって来たのですが、英語が大好きになって素晴らしく上達した子供たちが、どういうわけか、学校では「算数嫌い」であったり、「中学生になったら数学が全くわからない」子が大変多いことにある時気づいたのです。

そして同時に、子供たちやお母さんたちからは、「立林塾」のいつもの雰囲気で、やさしく丁寧に「数学」を指導して欲しいというニーズがたくさん出て来ていたのです。

そこで、中学校の「数学」の先生として、かつての教え子で数学が得意だったAEさんに頼んで、担当してもらいました。

それから次に、同じく教え子だったT君（彼は当時、中学の数学教師になることを目指していました。）に中学生の数学の講師をしてもらいました。

（T君はその後本当に中学の数学の先生になったのですよ！）

長男の亮が「算数」の先生として塾に参加することになったのは、この後のことです。

二〇〇四年（平成一六年）に大学を卒業した亮は、急に意を決して、立林塾の「小学校の算数」の教師になりたいと言い出しました。

私はもちろん大歓迎でした。

そこでその時、さらに庭を減らしてプレハブ教室を拡張し、英語用と算数用の二教室にすることにしたのです。

実は考えてみますと、私の子供たち（由紀、亮、淳）は高校生くらいから「アルバイト」でかなり長い期間、私のサポートをして、子供たちの勉強を見るキャリアを積み重ねており、「立林塾」の校風（他の受験塾とは全く違います）を良ーく理解し、生徒指導のノウハウにも習熟していたのでした。

(4) 伸びて行く子供たち

〈中学一年生のMさんの場合〉

「どうしたの?」と聞くと、「学校の授業や教材がつまらない」とMさんは言います。

つまらないので中学一年生から英語が大嫌いになり、成績が最低点になってうちの塾に相談に来られました。

でも、学校の英語の授業の教え方ではよほど我慢強いお子さんでもない限り、つまらないというのは当たり前なのです。（感受性の強いお子さんならなおさらです。）

そこで私たちはORTという由緒正しいのですが易しい英語の絵本

（オクスフォード・リーディング・ツリーという英国小学校の副読本です）を次から次へと与えて読んでもらいました。

易しいのですが、中身が楽しい物語ですから、読めば読むほどジワジワと力が付いて来るから不思議です。

また、私たちは英語のカードゲームを教えて楽しみました。

ゲームは「動詞活用ゲーム」や「形容詞活用ゲーム」（「形容詞活用ゲーム」は由紀が作ったもの）。

カードゲームは、ハートやダイヤなどのカードを皆で取り合って枚数を競う普通のゲームなのですが、ゲームの中で自分の順が来て、例えば「long」のカードを引いたときは「long-longer-longest」と大きい声で言うことになっています。

ゲームは競い合って皆でするので楽しいのですが、いつのまにか（小学生なら「long」の文字も初めは当然読めないわけですが、）

「long-longer-longest」の音が頭の中に入り、英語の文字までも何となく覚えてしまうというわけなのです。

こうしてできた記憶は、学校で英文法として無理に頭に入れるものと比べると、ずーっと将来の役に立つものなのですよ。

一年生のとき最低点だった彼女は、三年生になったときはもちろん英検三級に合格しました。

〈小学校六年間、週一回英語に通ったNちゃんの場合〉

Nちゃんは幼稚園で英語を少し習っていたとのことで、お母様が近所で続けて英語を勉強させたいと探し、うちの塾に来られたようです。

それで二、三人の一年生の人たちと一緒に英語を勉強し始めました。

Nちゃんは絵本が大好きな女の子で、塾から毎週絵本を借りて、自宅でたくさん読んでいたようです。

お母様の対応がとても上手で、（お母様は学生時代に英語が苦手だったこともあり、）Nちゃんが塾から帰ってくると、「今日は何を習ったの？お母さんは全く英語がわからないから、教えてね」と聞き役に徹して、いつも一緒に絵本

を楽しんでいたようです。日曜日にはお父さんも巻き込んで、塾で習った「BBカード」（ゲームをしながら、自然に英語のリズム、文構造を身に付けられるカード）のカルタ取りを楽しんでいたそうです。

もちろん、初めは字の読める大人が勝っていたのですが、しばらくするとゲームを会得してカードの英語が全部頭に入ってしまったNちゃんの独壇場になってしまったようです。

「大人の両親に実力で勝てる」というようなことが、子供としてはとても自慢でうれしいことだったのです。

Nちゃんは、ますますやる気になり、小学校五年で「英検準二級」（高校中級程度）に合格。

中学校に進むと塾を離れましたが、

一年生で英検二級（高校卒業程度）に合格できたようです。

〈英語だけは勉強の仕方がわからなかったK君の場合〉

どの科目もだいたいできるのに、英語だけはどうがんばってもいい点が取れない、勉強の仕方がわからないようだとお母さんが言います。

K君は中学二年の中ごろでした。私たちはいつもの通り、易しい本の「多読」といろいろな「カードゲーム」をすることを勧めたのですが、意外に思われるかも知れませんが、英語の勉強を一生懸命しているのに成績が良くならないという人の中には、「教科書の音読をしていない人」がたくさんいるのです。

良く勉強ができる子、あるいは男の子の場合時々いるのですが、「勉強」は授業を聴いてノートを取り、それをよく理解すればテストはできるものと思っていて、「英語の教科書を声を出して読むこと」と指導されても素直に従わないのです。

「英語」は「しゃべって使う言葉」であり、その言い回しやリズムが良ーく身

体に染み込まないと、使いこなせるようにならないのですが。

K君の場合は、教科書を声を出して読んだこともなかったらしく、最初は読むこともできませんでした。

私たちは、K君に、普段は「ＯＲＴ」（易しい絵本の多読）の授業をしましたが、学校の定期テスト前には、K君に「テスト前に必ずテキストを十回声を出して読むように」と指導しました。

K君がすぐに英語の成績が最高点になったことは、言うまでもありません。

二、西谷教室を開校して

(1) 二〇〇六年四月に開校

一九九〇年に「立林英語塾」を開塾して十六年目の二〇〇六年に、第二教室としての「西谷教室」が開校になりました。

ここは、娘の由紀と長男の亮が中心となってスタートしています。

私が、上菅田の自宅の片隅で生徒さん二人っきりから細々と英語塾を始めたころは、夫の紀孝はよく「ベンチャービジネスの始まり」とか呼んで、からかって楽しんでおりましたが、子供たち兄弟が中心になって（本格的に）「西谷教室」を始めることになったときは、さすがに彼も「オイオイ、本当に大丈夫なのか？」と心配になって来たようです。西谷教室は、上菅田校のＤＮＡを受け継いだものとは言っても、思い切って相鉄西谷駅近くに進出し、もちろん教室のスペースを有料で賃借した上で、生徒さんゼロからスタートしたのですから。

最初は赤字覚悟でスタートしたのを覚えています。

さて、話は戻りますが、それまで子供たちは（由紀も亮も）、静岡生まれで横浜育ち、幼少期に両親について香港に六年間行ったあと、小学生で帰国し、あとはほぼ横浜でずっと育っています。

由紀は、横浜市内の大学を卒業したあと、二〇〇一年から二〇〇五年まで市内の中・高校（横浜富士見学園）の英語教師を務め、四年間勤務したのちに塾に

転職したわけです。

教師生活はとても楽しかったようですが、小さなころ立林塾で体験した授業が懐かしく、今度は指導する側に回って試してみたいなという思いが強くなって来たようです。

由紀とは二歳年下の亮も同じように横浜っ子の道を歩んでいますが、彼は大学を卒業するとすぐに（二〇〇四年から）上菅田教室で算数・数学の授業を始めています。

二〇〇六年の年初くらいになって、いよいよその方向が固まってきましたので、あわてて教室の場所を探そうということになりましたが、この時点でとてもラッキーなことがありました。西谷駅南口の現在の西谷教室のあるその場所でそれまで長年塾を開いてこられた「杉森塾」の先生が、ご年齢でそろそろ引退しようとしていたその時にちょうど巡り合い、先生と私たちは意気投合するとともに、机やいすなどの施設も譲り受けてスタートすることができたのです。

始めたばかりの西谷教室の生徒さんはというと、上菅田教室に以前から大変時

間をかけて通われていたような方々（例えば大和や鶴ヶ峰等から通われていた中学生・高校生の生徒さんたちもいたのですよ）が、西谷教室に教室を変更されるというようなところから始まっています。当時は、新聞のチラシや自分たちでのポスティングなど随分宣伝活動に力を入れていたのを覚えています。おかげさまで西谷教室は交通の便がいいので、特に中学生の生徒さんが、次第に横浜のあちこちから通っていただけるようになってきました。

西谷地区の公立学校の生徒さん以外にも、横浜市内の私立中高一貫校の生徒さんが英語の勉強のためにわざわざ電車で通って来て頂けるのも、便利さの所以であると思います。

なお、二〇一〇年からは、次男の淳が上菅田・西谷両教室の「理科」の教師として塾に参加しました。兄弟三人がついに顔を揃えたことになります。彼は理科系の大学の出身である特徴を生かし、夏休み時の「理科実験教室」なども交えながら、「日頃は難しく感じる理科の授業を分かりやすく説明する」をモットーに授業に取り組んでいます。

(2) 塾を支えてくれる先生方

〈大切なパートナー 山内先生〉

山内先生は、私たちが二十五年前に上菅田町に引っ越して来た日に、食べ物を差し入れに来て下さった、私の高校時代（清水東高校）からの友人です。当時はたまたま近くの竹山団地に住んでいらっしゃいました。今は川崎市に引っ越してしまわれましたが、自動車を運転して上菅田教室に通って来てくださいます。

当初は高校生の英語の個別指導を手伝っていただきましたが、塾が5科目教育

を行うようになってからは、社会や国語、数学も教えていただき、今では私にとってかけがえのないパートナーです。

〈万能の角田（つのだ）先生〉

角田茉奈先生は、本来は国語専門の先生なのですが、英語も社会も数学も教えることができる本当に万能な先生です。
生徒さんたちからの人望も厚く、とても能力の高い、かけがえのない先生。
音読大会のモデルスピーチも大変上手です。
小学三年生から「立林塾」の塾生で、大変優秀な成績を収められていました。

〈中村愛美（まなみ）先生〉

愛美先生は、上菅田校で英語と数学を担当していますが、ご本人も小学校六年から「立林塾」の塾生だったので、私どもとはもう十年以上の付き合いということになります。

いつも冷静で忍耐強く、私どもを支えてくださいます。昨年の前半は半年ほどイギリスに留学され、英語に磨きをかけて来られました。音読大会のスピーチも素晴らしいです。

〈永谷孟則（たけのり）先生〉

最近まで塾の講師をしてくださっていた永谷先生は、主に中高生の英語を担当していたのですが、数学の指導も手伝ってくれました。
彼はスペイン語が第一言語の人ですが、日本語も完璧で、英語も大学時代に英検一級を取っているという語学の才人です。四月から外資系の会社に就職されます。

〈御厨（みくりや）静香先生〉

静香先生は、大学卒業後から昨年一月まで六年間にわたり、私どもの塾で、小学生や中学生の英語のみならず、国語や社会の指導も担当してくれた非常に能

力の高い先生でした。
実は彼女は、小学生のころから「立林塾」の塾生だった人で、高校生の時にはご自身で一年間アメリカに留学をしました。
日本での高校時代には、スピーチコンテストに多数入賞した経歴もお持ちです。
当塾の音読大会でも、素晴らしいモデルスピーチをしてくださったのが、印象的です。

〈秋田麻美先生〉

麻美先生は、静香先生の前に数年間、小学生と中学生の英語の指導をサポートしてくれました。
小学生の時から「立林塾」の生徒でしたが、高校はカナダで過ごしたあと、卒業して帰国すると「立林塾」の講師になってくれました。
英語しか喋らない華やかな存在で、特に小学生の憧れの的になっていたように思います。

〈手島藍先生〉

藍先生は、三年ぐらい前の四年間、大学生のときに、英語の講師をしてくれました。途中で一年間ノルウェーに留学し、ブリティッシュ・イングリッシュを身に着けて帰国されました。
高校生の指導もできる能力の高い方で、現在は航空会社のフライトアテンダントです。

三、「子供たちの英語上達の秘訣」お教えします

(1) 英語喉（のど）で、大きな声で音読

私は子供たちに英語の授業をするとき、とても楽しくやっています。
英語の発音と日本語の発音はとにかく違うので、教室に来たら、生徒たちに思いっきり「英語喉（のど）」になってもらうしかありません。

それで、私は英米人になったような大げさな口ぶりの日本語で、発音がどんなに違うかを説明するのです。

（この大げさな英米人風の日本語は、何だかおかしいので、生徒たちにとても受けています。）

「英語喉（のど）」とは？

つまり英語を発音する時は、遠くに声が通るように「喉（のど）」で声を出しています。英語の場合は、口蓋垂（のどちんこ）の奥が九〇％発声器官になっています。口（一〇％）はただの音の出口に過ぎません。日本語は喉

を閉じて切って発音します。「ま・み・む・め・も」が良い例です。日本語は口で発音しているのです。

英語の発音は日本語と全然違うのですから、「大きな声で言うこと」「口の筋肉をたくさん使うこと」「喉を使うこと」がとても重要なのです。

私は英語をしゃべる時と、日本語をしゃべる時では、人格も姿勢も全く違います。姿勢は背中がすっと伸びて、とても堂々としていて、お腹から発声しています。

ですから、生徒がＢＢカードを日本語読みで「ベティー・ボター　サム　バター　フォー　ハー　マザー」と言ったら、私は「Eigo ni Kikoe Naidesu Yo!」と（「英語に聞こえないですよ」を英米人風の英語喉で大きな声で発声して）注意しています。生徒に英語喉発声を思い出すよう促すためです。

どうぞご自宅でも、お子さん達と英語の音読をするときには、英米人になったようなつもりで、「大きな声で」「口の筋肉をたくさん使って」「英語喉を使って」「姿勢を良くして」「お腹から声を出して」なさってくださいね。

(2) ＢＢカードを聴かせて、聴かせて、そしてリピートする

私どもの塾では、小学生のうちは、とにかくＢＢカードを聴かせることが指導の基本方針です。

とにかく聴かせる、聴かせる、そしてできればリピートさせること。

だから、リピートをしたくない子の場合は、六年間何もしない子もいますが、私どもは全然驚きません。

とにかく楽しく通って来れば（力はついているので）ＯＫなのです。

とにかくあまり小細工をしないことです。私どもの塾では、高学年になるまでは書かせることもしていません。

子供たちに授業の中で書かせようとすると、パッとすぐに書ける子もいれば、どんなに時間をかけても書けない子もいます。

差があり過ぎですので、低・中学年のうちは「書くこと」は授業内ではやらないことに決めてしまいました。

その時間を、一回でも多く、「聴くこと」「言うこと」に当てたいからです。

教師からの「日本語での声掛け」も基本的にはやっていません（先ほどの「英語喉」の時の外人風の語り掛けを除けば）。

英語脳にしたいので、「英語での問い掛け」をしています。意味が分からなくてもＯＫなのです。

ＢＢカードというのは、「セルム児童英語研究会」が発行しているカードで、私どもの塾ではもう十三年くらい前から使い続けています。

児童英語を個人で教えているような全国の先生方には、ある程度広く認められたツールと言えるものでしょう。

ＢＢカードは、色々なかわいい絵と短い英語が書かれている、トランプカードに模したカードで、全部で六十四枚のカードからなっています。

最初のうちは生徒には英語の文章は見せません（もちろんまだ小さいのですから英語の文字は読めはしないのですが）。

生徒たちは絵を見て、私たちが言う英文を聴いて、そして何度も口真似をして繰り返しているうちに、語呂のいい英語の短文を自然に覚えてしまうのです。私たちはBBカードを使ってビンゴゲームをよくしますが、生徒たちはこれが大好きです。

とにかく楽しくやるのが大切です。そして教師も一緒に楽しんでゲームをすることが大事なことなのです。

（子供たちは敏感ですから、先生が遊んでないで、何か教えようとしているな、と気付いてしまいますから。）

皆さんは、こんな調子で遊んでばかり

でいいのかな?と思われるかも知れませんが、小学生は基本的には、BBカードのオリジナルセンテンスが言えれば良いと思っています。文法はわかるはずがないのです。教えようと思っても無理が多い。無理に教えようとすると、子供たちは英語を嫌いになってしまいます。

(3) 絵本を貸し出して家でも多読、そして音読大会

私たちは小学生には、週一回一時間の授業で、「BBカード」と「読み聞かせ（ORT（オクスフォード・リーディング・ツリーという英国小学校の副読本））の二つを、ほとんど日本語は使わないで行っています。

そして、お母様方には、「音読、多読のクラスですので、お家でも英語を読んであげてくださいね。お母様が例えば、どんな変な発音でも（失礼！）いいの

ですから」とお願いしています。

ＢＢカードで六十四の文章を繰り返し聴き、言えたらゆっくりとでもいいから、正しい発音と喉をあけた発声で大きな声で言えるようになると、自然に「聴き取り力」がついてきます。

よく語学習得を水汲みに例えて、「水をどんどん入れ物に入れて行くと、しまいに一杯になったときに、自然に（言葉が）こぼれ出るようになる」と言いますが、小学生の英語の力の付き方は本当にその通りだと思います。

私どもの塾の授業は、「先生の言っていることは、まあ何となくはわかるなあ」「毎回ＢＢゲームで楽しいなあ」で過ぎて行き、英検のリスニングテストでも、何となく「これかなあ?」と思って○をつけると、だいたい合っていて合格、となって行きます。

でも、もししっかり教えられてしまった子供たちであれば、恐らくリスニングで

ちょっとでもわからない単語が聞こえると、そこで思考が止まってしまい、そして気持ちを取り戻す間に、次を聞きのがすということになっているのではないでしょうか?

（ＢＢカードを小学生のうちにやっていない中学生は、リスニングの力がなかなか伸びて来ないのと同じです。）

音読、多読も、初めは同じ文章を何度も繰り返し読むことが大事です。

ＯＲＴをずっと読んだ子もいれば、大好きな絵本をそれだけ毎日毎日読んだ子もいます。

繰り返し同じものを読むことが大切で、簡単なものでもいいのです。

私どもでは、英語のやさしい「絵本」の大量

なストックがあり、絵本の貸出をしていますが、ＣＤ（音源）は付けません。本だけで十分なのです。生徒たちは、厚さ五ミリくらいの薄い絵本を借りて行くのですが、家でお母さんといっしょに気に入った薄い絵本を何度も読んでいるうちに、自然に絵本の中の言葉を覚えて行くのです。

ＢＢカードで英語のリズムを覚えて行くのと全く同じ、自然な方法なのです。もちろん初めは絵本を見ても誰も読めません。だから絵本の絵だけを見て楽しんでいてもいいのです。

そして一緒に読んでリピートをさせます。そのうちに自然と読めるようになって来るのです。

そして大事なことは、ちょっとでも上手に読めたら、皆の前で大げさなくらい誉めてあげること。

そうすると子供は自分がとても出来た気分になってどんどんやる気を出してくれるようになります。

そのうちに本当に上手に読めるようになりますよ。発音が多少悪くても絶対に

直したりしません。一回でも直したら、子供は声を出さなくなってしまいます。声に出すことが一番大切で、発音は徐々に良くなって来ますから大丈夫なのです。

そして最後に私どもの「音読大会」についてご紹介しましょう。

定期的にイベントとして行っていますが、以前は「英語劇」をやっていたのです。

ただ「劇」にすると、どうしても出来る子に台詞が多くなってしまうので、「一人で一、二冊の絵本を三分以内で読むこと」というルールを作り、「各自のレベルに合った絵本を選んでもらい」実施しています。簡単な本を選ぶ子、難しい本を選ぶ子といろいろです。

そして大会の最後には投票をして、たくさん票が入った子にご褒美を差し上げています。

おわりに

（これからも地元の楽しい塾を目指して）（立林紀孝）

「妻が自宅で塾をやっているのですよ」と何の気なしに勤務先で言ったりしますと、「ああ、それは大変な仕事ですねえ」と言われたりします。（受験生相手で大変だなあと思うのでしょうか？）

大変？？いつも嬉々として働いていて、土曜・日曜も親御さんとの面談（教育相談でしょうね）に応じているし、「ハロウィン」だ、「音読大会」だとよく大騒ぎで準備していますので、とても「苦労」しているようには思えません。「女の人は好きなことを仕事にしているからいいなあ」とそばでは感じています。

妻の塾（立林塾）はどうもほかとは変わっているらしく、小さな小学生の生徒さんとゲームや本読みなどをしていて、もちろん難しい文法などをやっているわけ

ではないのですが、小学校二・三年くらいでも中学生に交じって英検三級（中卒程度）に受かってしまったりするようです。（受験したお子さんがわからなかったのは、日本語で書いている質問がまだ難しくて、質問の意味がわからなかったことくらいだったとか）

私が一番面白かったエピソードは、立林塾で育った生徒さんが転居で他の学習塾に通うことになったその体験談で、「洋子先生、私は塾というのは、みんなでゲームしたり、音読大会をしたりして、楽しいところだと思っていたら、違うんですねえ！」と驚いていたという話です。（その子のあぜんとした様子が目に浮かびます。）

「立林塾」が、受験に受かる目先のテクニックを教える塾ではなく、受験の先にある長―い人生において、職場や家庭において実際に役に立つ「英語」や「数学」などを身につけさせてくれる、地元の暖かーい、でもパワフルな塾のままでいつまでもあり続けてくれることを祈っております。（一人のサポーターとして）

「立林塾 開塾二十五周年記念」

（平成 27 年 4 月 1 日発行）

「いっしょにやろう、できるまで。」

立林塾　塾長：立林洋子
ホームページ：http://tatebay.com/
メール：info@tatebay.com
（上菅田校）：Tel 045（383）6650
（西谷駅前校）：Tel 045（371）7895